

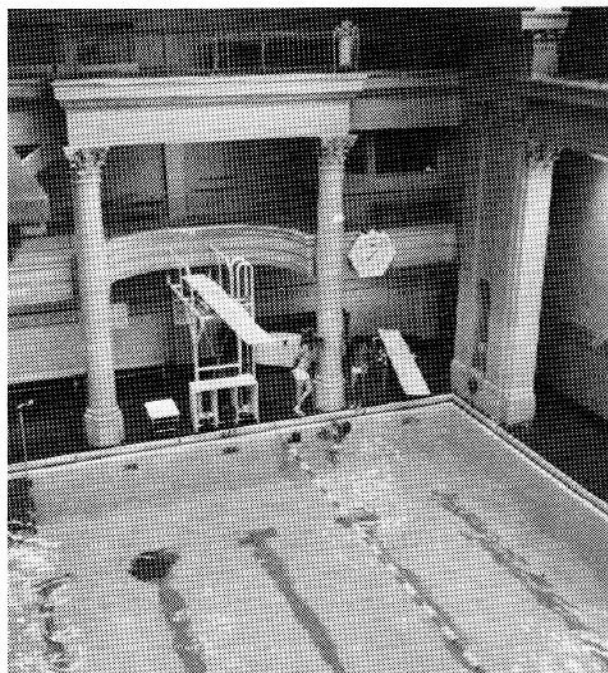
アメリカのヘルス・クラブとスイミング・クラブ

今野 純*

5月17日(火)午前6時30分、ニューヨーク市セントラル・パークにはたくさんの人々が走っていた。渡米前に読んだ本のなかに〈中産アメリカ人の10人に1人は何らかのエクササイズをしている〉と書いてあったが、あんなに多くの人々が早朝の寒気のなかをモクモクと走っている光景を目の当たりにして私は驚いてしまった。多分、1000人以上の老若男女がジョギングしていたと思う。少々気遅れしたが、私も仲間入りして45分ほど走ってみた。走りながら周りの人々を見ると、アレーに似た錘を両手に持って走っている人を多く見かけた。なかには犬を連れて走る人、音楽を聴きながら走る人、縄跳びをしながら走る人、と実に個性的であった。

後日知ったことであるが、彼らが両手に持っていた錘は「ヘビーハンド」(heavyhands)という商品名で売られている。錘部が交換式になっており、手の甲にストッパーがついた変形アレー。〈エアロビクスからパン・エアロビクスへ〉というキャッチ・フレーズでジャズ・ダンス等のスタジオでも大いに使用されている。只今流行中の軽トレーニング用具であった。

走った後、朝食を摂りにセントラル・パーク近くのレストランに入り、メニューを見て驚いた。一品ごとにカロリー数が表示してあるのだ。繁盛している飲食店はほとんどがサラダ食べ放題。アルファルファ草を好んで食べていた。街にはチェーン化されたビタミ



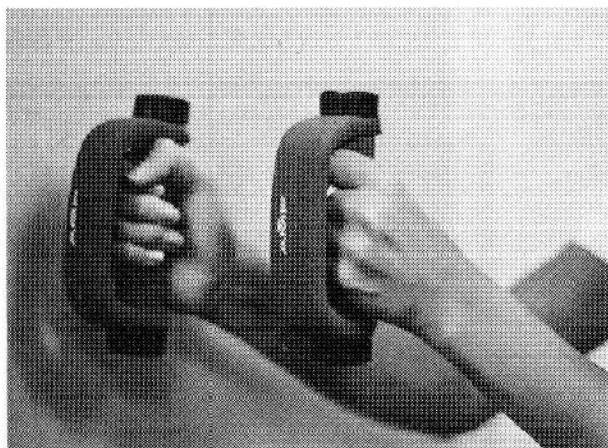
サンフランシスコ・オリンピック・クラブ(アスレチック・クラブ)

ン・ショップが立ち並び、自動販売機で売られているソフト・ドリンク類はほとんどがシュガー・フリー(糖分ゼロ)。街で見かける紙巻タバコを喫っている人は女性と子どもばかり。チョット異常とも思えるアメリカ人のヘルシー・ブームには驚いてしまった。

今回の私の渡米期間は2週間。目的は2つあった。1つは東部、中部、西部におけるタイプの異なったヘルス・クラブを見学すること。もう1つは最近低迷している中小スイミング・クラブの現状を知ること、この2つである。

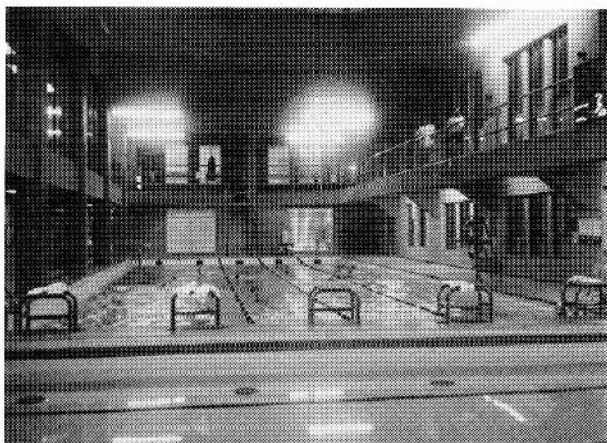
ご存知のようにアメリカは日本の25倍の国土面積、2倍の人口、3倍の国民総生産額を有する富める国である。が、〈アスレチック・クラブ〉と称するところはたかだか20余カ所しかない。ニューヨーク市は人口1600万人。東京に比べその富の差は5倍以上あると思われる大都会であるが、アスレチック・クラブは唯一〈ニューヨーク・アスレチック・クラブ〉のみである。行ってみてその理由が解った。

アスレチック・クラブと称するところは男性のみが



ヘビーハンド

* Jun Konno——キングダークラブ鶴見



ロスアンゼルス・アスレチック・クラブ

集まり心身を鍛え、情報を交換し、教養を深める女人禁制の社交クラブなのである。ほとんどのアスレチック・クラブは10数階立ての重厚な高層ビル。運動、飲食、宿泊、図書等各4部門から成り立つまさに“男たちの城”であることを知った。運動部門1つとってみても、その施設内訳は水泳プール、ランニング・トラック、アスレチック機器、サウナ、スカッシュ等の屋内コート。加えて市郊外にはゴルフ場、テニス・コートをも有している。クラブには午前6時より午後10時までたくさんの男たちが出入りし、汗を流していた。もし、同等のアスレチック・クラブを日本で設立しようとすれば、施設投資だけでも50億円は楽に要するであろう。今日の日本の文化水準ではとても「アスレチック・クラブ」と称するものの設立運営は無理だ、と痛感した。

一方「ヘルス・クラブ」あるいは「ヘルス・スパ」と称するところは全米に4000カ所以上ある。こちらの方はかなり庶民的な施設で、さしずめアメリカ版銭湯屋さんといった感じだ。ヘルス・クラブの歴史はかなり古いらしいが、産業として急成長したのはこの5年ほど前かららしい。現在では全米主要都市に200カ所以上のヘルス・クラブのチェーン化に成功した会社(シルエット・アメリカン社)が出現するほどの勢いである。今後5年間は急成長が続くと見込んでいるようである。

ヘルス・クラブ会社が外食産業の中小会社を吸収合併して、郊外ハンバーグ店をヘルス・クラブに衣替える動きもあると聞いた。ちなみに、アメリカ人の外食ニーズは今やハンバーグからローストビーフ・サンドへと質的变化をしているらしい。街中のハンバーグ店では黒人と少数民族の人々を多く見かけた。日本でも馴染みの深いマクドナルド、ケンタッキーマスタード、デニーズといった外食産業御三家を除き、他社の経営内容は年々悪化していると聞いた。

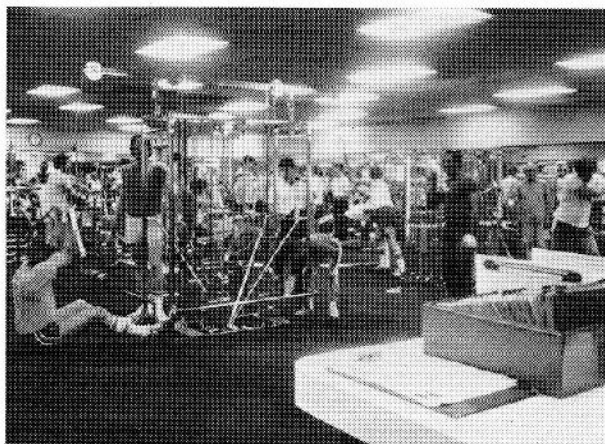
ヘルス・クラブの施設規模は大中小でそれぞれ内容が異なっている。が、今日の日本でも十分出現の可能

性大の施設規模は400坪前後を要する小型ヘルス・クラブであろう。アスレチック機器等が置かれてあるドライ・エリア部門と、小プールやサウナ等があるウェット・エリア部門とが実に合理的にコンパクトにまとめて配列されているのには感心した。

某小型クラブのマネージャーが「うちは清潔度を120%に保持している」と自慢していたが、たしかに繁盛しているクラブは例外なしに極めて清潔であった。スチームとドライ・ヒートの複合サウナ施設の完備も素晴らしかった。その上、年会費の額を聞いて驚いた。なんと初年度は400ドル程度、次年度からは100ドル以下の低会費。日本的にいうと、銭湯並みの料金で水泳プール、複合サウナ、アスレ機器等が年間通じて朝から晩まで利用できる。加えて、簡単な健康相談まで受けることが可能なのである。したがって、1クラブのみで会員数1万人、日間延べ使用者数が1000人以上というところもそう珍しくはないらしい。

日本でも数年前から「ポスト外食産業の本命はヘルス・クラブ産業だ」との声をときどき聞く。まだまだ日本人の食べる肉の量は少ない。もっと食べるようになったら、アメリカ人のような肥満者が街にあふれ、太った人はそれだけでビジネス界からはじき出される競争社会が到来するかもしれない。日本人のライフ・スタイルにいろいろな新変化を起こしてきたあの「団塊の世代」の人々も(実は私もその世代の1人なのだが)30代半ばにいる今日。彼らが40代に入る頃には、同僚との夜の付き合いを多少犠牲にしてもヘルス・クラブに週2~3回通い、水泳とサウナとアスレで汗を流し、体形をスリムにしてちょっとオシャレをするような中年日本人が増えるのではないだろうか。前記した清潔度120%のクラブのマネージャーが「女性会員の場合は単に体形的な美しさを求めてクラブ通いする人が多いが、男性会員の場合は生き方を搜すために運動する人が多い」といみじくもいった言葉がとても印象的であった。

ところでスイミング・クラブの方であるが、いわゆる有名大型クラブは1カ所も訪問しなかった。それら



シルエット・アメリカン・ヘルスクラブ(デトロイト)

のクラブには毎年多くの日本人が訪問しており、かなり詳しく紹介されている。したがって、私は日本人がほとんど訪問しない中小クラブを数カ所訪問した。なかでも最も印象深かったのはデトロイト市郊外デアボーンにある小クラブである。20ヤード(18メートル)3コースのとても小さなプールで、ポッパー氏が率いる30余名の少年少女たちが泳いでいるのを見て感動した。早朝6時。まだ夜明け前であたりはまっ暗であるが、数燈のライトをつけたなかで元気に子どもたちが泳いでいた。登校前2時間、下校後3時間、計1日5時間練習するそうである。「今日はどのぐらい練習させるつもりか」と聞いてみたら「今は泳ぎ込みの時期なので、今日は8マイル泳ぐ予定だ」といった。なんとタテ18メートルのミニ・プールで1万3000メートルも練習するのである。彼のコーチとしての心意気にはただ恐れ入るばかりであった。「この環境には決して満足していないが、この環境のなかで可能なかぎりベストを尽したい」「それでも、うちの子どもたちはターン技術に関しては誰にも負けない。なにせ20ヤードのプールなので、他クラブの子どもたちに比べ2倍は多くしているからね」と自慢げに片目をつぶってみせた。

アメリカのエージ・グループ水泳人口は70年代後半の400万人をピークに年々減少している。今日では20%減の300万人強だといわれている。その主たる理由は①エージ・グループ・システムの陳腐化、②年少児への重トレーニングの早期開始、③ボランティア・コーチの不足、のようである。どうも競技志向へ偏重するあまり、青少年活動に不可欠な教育的配慮が欠如してきたのではないかと思われる。街中の本屋さんには「トータル・スイミング」とか、『エアロビックス・スイミング』と題した“のんびり泳ごう”的な水泳書が多く並んでいた。

とはいっても水泳王国アメリカのパワーは相変わらず強力である。あのパワーの底辺にはポッパー氏のような一見宣教師かと思えるほど清くまじめな無名コーチが無数に存在するのである。アメリカ水泳界の強さの源泉は彼のような名もなく労多き指導者たちの質の高さだと痛感した。